

慶應言語学コロキウム

併合の新たな適用と二重側方移動

講師：高野 祐二 氏 (金城学院大学)

[日時] 2019年1月19日(土) 13:00-18:30

[会場] 慶應義塾大学三田キャンパス北館3階大会議室

*参加費無料・事前申込不要 (会場にて参加者カードへの記入が必要となります)

本発表では、併合の適用形式を拡張することで「二重側方移動 (double sideward movement)」という新たな形態の側方移動が可能になることを提案し、その帰結を探る。二重側方移動は、以下の形の併合により派生される。

- (1) a. $S01 = \{\dots X \dots Y \dots\}$
 → X と Y の併合
 b. $S01 = \{\dots X \dots Y \dots\}$
 $S02 = \{X, Y\}$

まず、(1a)の S01 を形成した段階で、内部に含まれる X と Y に併合を適用する。その結果形成される $\{X, Y\}$ は、(1b)のように、S01 の外側に生成される。その後の派生で S01 と S02 は最終的には併合され、1つの S0 になる。この派生において、(1a)から(1b)の段階で X と Y は両方同時に1つの構造 (S01) から別の構造 (S02) に移動しているため、X と Y の移動を二重側方移動と呼ぶ。

二重側方移動の提案を支持する経験的証拠として、日本語の多重分裂文 (複数の焦点要素を持つ分裂文) が示す特異な現象を取り上げる。多重分裂文は、単一の焦点要素を持つ分裂文とは異なり、島の効果を示さない。この特性は、多重分裂文の派生に二重側方移動が深く関与していることから生じるとする分析を提案する。さらに、多重分裂文に観察される同節効果は、二重側方移動と転送の相互作用の帰結として説明できること、および、この分析が同節効果の有無について新たな予測をすること、そしてその予測が正しいことを示す。また、関連する問題として、演算子移動とスクランプリングの性質、Wh 句の再構築効果、併合適用に対する制限、二重側方移動によって形成された S0 のラベルなどについても考えてみたい。

[お問い合わせ先]

〒108-8345 港区三田2-15-45 慶應義塾大学言語文化研究所
 電話：03-5427-1595 (事務室直通) メール：genbu@icl.keio.ac.jp
<http://www.icl.keio.ac.jp>